

S.M 地方自治体職員

琉球大学大学院

地域共創研究科卒

私は、琉球大学の学部を卒業し、同大学院に進学をした。水中考古学と陶磁器の研究を進めるためである。大学に入る前から水中考古学に関心があり、将来的にそれに関わる仕事をしたいと考えていた。しかし、学部時代はコロナ禍であったため、研究室の考古学的な調査が少なくなるなど、満足のいく学部時代だったとは言いきれなかった。学部卒業後の進路を考え始めた頃に、コロナが落ち着きはじめ、研究室の活動もできるようになったことから、学部時代に経験できなかったことをやり切りたいと思い、同大学院に進学した。沖縄県は日本全国のなかでも水中考古学に関心が高い地域であり、学びやすい環境が整っていた。昔から周辺地域との交易が活発な地域であったため、歴史の痕跡が水中に残っていることが多く、県、市町村の文化財担当の方々による調査が活発に行われているのである。また、県・市町村の文化財担当の方々のなかに、大学時代からお世話になっている方が多くいたため、色んな情報を得ることができ、調査に参加させていただく機会があった。

水中考古学の調査に関わるには、多くの知識と経験が必要であった。知識はもちろんのこと、ダイビングができないといけない。だが、大学院のほとんどの期間は体調不良となり潜れない日々が続いた。焦りや不安が募り、自分を追い詰めてしまった。この時期は、考えすぎてもいけないと思い、以下の①から③の行動をとった。文化財に携わる人々は、マルチである必要があるからであるため、できることをやろうと考えた。

- ①展示→大学の博物館や市町村の博物館で、水中考古学や肥前陶磁器に関する展示の作成を行った。
- ②壺屋焼物博物館における勤務→陶磁器を考古学的だけでなく、美術的な観点からみる思考づくりとなった。
- ③那覇市文化財課→陸上の考古学における発掘調査や開発調整等を知ることができた。

最終的に、大学院 2 年生の 11 月に沖縄諸島の久米島における水中考古学の調査に参加させていただいたときに潜ることができた。水中で作業するには、まだまだスキルが足りていないが、潜れたことがなによりうれしく自信がついた。また、こうした調査に参加させていただいたおかげで、何を目的に調査研究をするのか考えることができた。さらに調査と主体となる人の動きを知ることができた。

陶磁器の研究は、学部の卒業論文に引き続き、江戸時代における現在の佐賀県、長崎県地域において生産された「肥前陶磁器」の研究を行った。上記にも書いたように、現在沖縄県とされている地域や鹿児島島の島々を含む琉球列島は、他地域との交易が盛んであったため、これらの陶磁器がたくさん出土している。学部時代は、沖縄諸島を中心に研究を行ったが、修士課程では鹿児島島の島々や八重山諸島などフィールドを広げた。

また、報告書に掲載されていない資料を各市町村などで調査を行った。特に、台湾での資料調査は自身の研究の幅を広げることのできたとても良い経験となった。

このように、水中考古学の調査や肥前陶磁器の研究を中心に大学院生活を送った。今後はこれらをもとに、陶磁器貿易の状況を明らかにしていきたい。商品として運ばれた陶磁器は、水中遺跡の情報も取り入れることで、貿易ルートを推測することができるからである。在学中に論文執筆や研究発表などはできなかったが、今後も仕事と並行しながら研究活動を行っていきたい。

2年間を振り返ってみると、決して楽な2年間ではなかった。けれども、この期間があったからこそ、身についた知識や考え方がある。特に、自分に足りない力、自分と向き合うきっかけをくれた期間だったと思う。これは、今後の人生の財産にも自信にもなると思う。現在は、日本の水中考古学の最前線といわれる長崎県内の研究展示施設に勤務している。今後も、考古学的な調査・研究方法を身につけていき、陶磁器貿易について研究していきたい。

最後に、学部時代も含めて、沖縄県で6年間過ごしてきたことで自分を俯瞰的に見ることができるようになった。自分が当たり前だと思っていた文化や言葉などは別の地域に行くと通じなかったりなど、視野が広がる経験をたくさんすることができた。また、同じ感覚や考え方を持つ友人や先輩、後輩がたくさんできたことは本当に恵まれたと思う。学部時代はコロナ禍で、上手くいかないことの方が多かったが、それを言い訳せずに行動できたことは良かったと思う。時間を掛ければできないことは無い。これからが人生のスタートである。努力していきたい。